

人、新しいこと、未来

DAINICHISEIKA CORPORATE MAGAZINE

2022
Mar.
VOL.

01

大日精化の未来が
見えてくる広報誌、誕生！



私たち大日精化グループは昨年10月に創立90周年を迎えました。

創業者の高橋義博は、満州事変や世界恐慌に揺れる1931年、顔料の国産化を志して、大日精化の前身となる彩華顔料合資会社を設立しました。以来、大日精化は、顔料やインキ、着色剤などの色材に加え、樹脂やコーティング剤などの機能材に参入し、色彩の総合メーカーとして、さらには機能材メーカーへと発展を図ると同時に、色彩と素材のグローバルブランドを標榜



代表取締役社長
高橋 弘二
Koji Takahashi

し、アジア、アメリカ、ヨーロッパなど海外拠点の整備を進め、現在へと至っています。

世界大戦と高度経済成長に象徴される昭和、バブル経済からの世界金融危機と東日本大震災を経験した平成、コロナ禍に苦しみ令和と、それぞれの時代に困難が立ちはだかりましたが、私たちは、持ち前の技術力を生かして新しいことに挑戦し、社会貢献を通して常に明るい未来を希求してきました。

こうした先人の足跡を振り返るとともに、100周年を見据え、さらなる社会・環境への貢献と企業価値の向上を目指して、新しい時代を拓いていく必要があります。

現在、世界の事業環境は大きく変化しつつあり、特に私たちが身を置く化学業界の変動は過去に例を見ないものとなっています。脱炭素化やDX（デジタル・トランスフォーメーション）が急速に進行する中で、私たちが今後も社会に貢献していくためには、社会の変化に追随するばかりでなく、私たち自身が率先してイノベーションを起こしていくことが求められます。

先日公表した中期経営計画では、技術力の強化、ESG経営の推進、海外事業の拡大を基本戦略に据え、技術力を生かしてサステナブル社会の実現に貢献し企業価値を高めていくことを10年後のミッションとしています。グループ全員の力を集結して計画を達成し、その過程を通して一人ひとりが社会に貢献することを期待しています。

広報誌の新装刊にあたって

創業90周年を迎えるにあたり、従来から刊行してきた社内報を、より多くのステークホルダーの皆様にも公開し、大日精化のすがたをお伝えする広報誌としてリニューアルしました。

タイトルの『人、新しいこと、未来』は、大日精化の企業理念である「人に興味を持とう」「新しいことに興味を持とう」「未来に興味を持とう」から、それぞれの主語を取り出したもので、読者の皆様に、大日精化とそれに関わる「人」、大日精化が挑戦する「新しいこと」、そして大日精化の「未来」に興味や関心、期待を持っていただきたいとの願いが込められています。

従来の紙媒体に加え、大日精化ホームページに電子版を掲載します。皆様のご意見、ご感想などお聞かせいただければ幸いです。



特集

大日精化工業の歩み 社会を彩り続けた

90年

「国産の顔料を作る」。

その志を掲げて創業者・高橋義博が会社を立ち上げたのは1931年。

以来、社会とお客様のニーズに応えながら、
大日精化工業は歩みを続けてきました。

当社の90年の歴史をここに紐解きます。



創業90周年にあたって

受け継がれてきた技術をさらに磨き、 新しい未来を切り開く

顔料の 国産化 を目指して

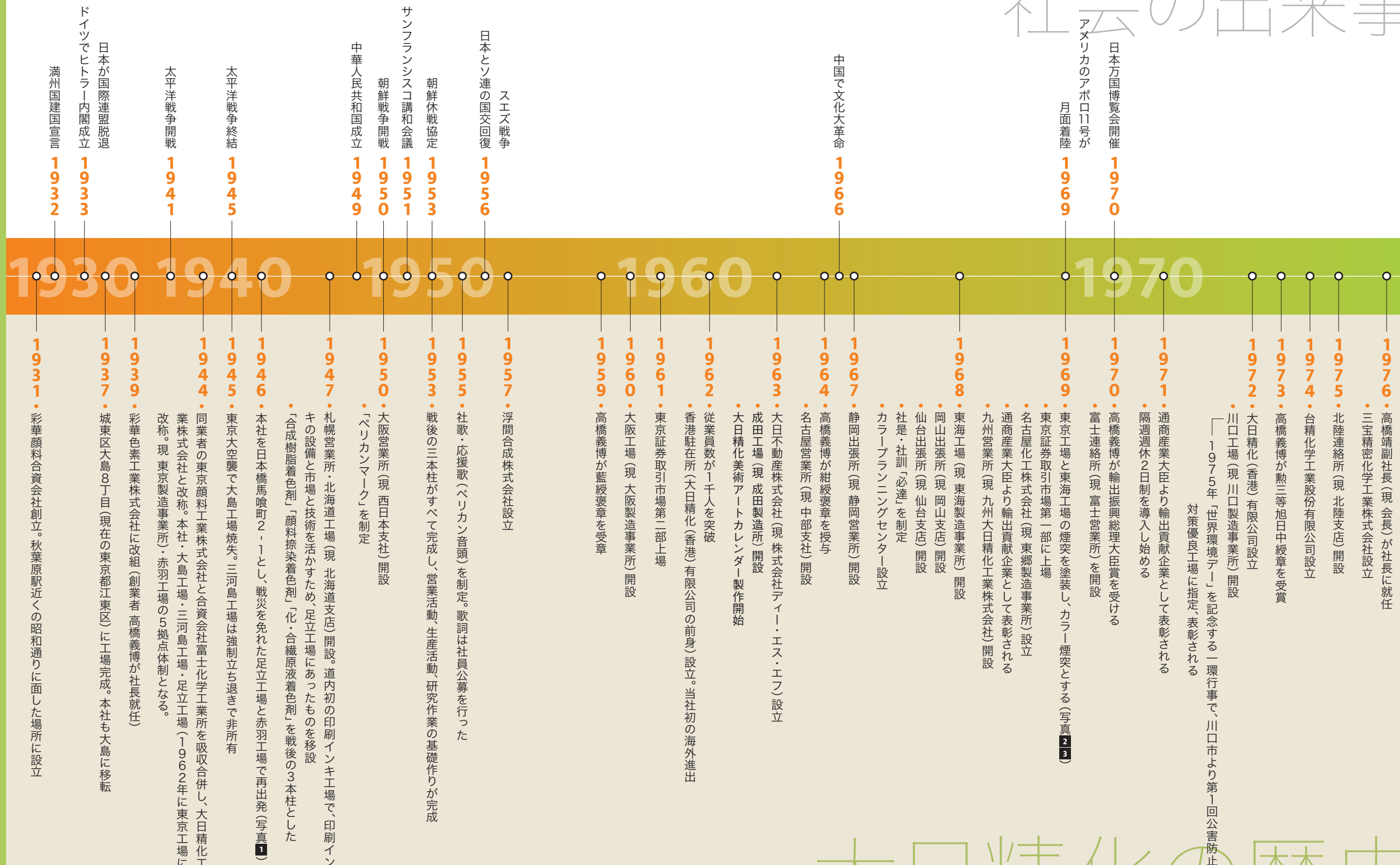
創業者・高橋義博は戦前、顔料の多くを輸入に頼っていたことを憂い、1931年に顔料の国産化を目指し彩華顔料合資会社を創業しました。顔料はそのままでは使いにくく、顔料を普及させるためには使いやすい形にしなければならぬと考え、研究開発を始めました。

“ 何ができるかではなく、
何が売れるかを考える ”

1930年代、中小企業経営者の多くは技術屋か職人あがりでしたが、創業者・高橋義博は商人でした。その利点は、需要者の側に立って考えられること。何ができるかよりも、何が売れるか、何を需要家が望んでいるかを先に考えました。勘ではなく、たくさんの情報を精査し、顧客の事業計画を見極め、自社の方向付けを行い、研究開発を行うというスタイルは、多くの企業家に共通する部分であり、現代でも通用するものです。

創業者
高橋義博

※20歳前後の写真



大日精化の歴史

TOPICS

社名の由来

大日精化工業という社名は、「大日本精密化学」という意味です。顔料は、近代合成化学技術によってつくられ、当時、医薬と並んで精密度を要求されると言われていました。精密化学＝ファインケミカルは、当社の性格そのものを表しています。



当時の本社ビル

TOPICS

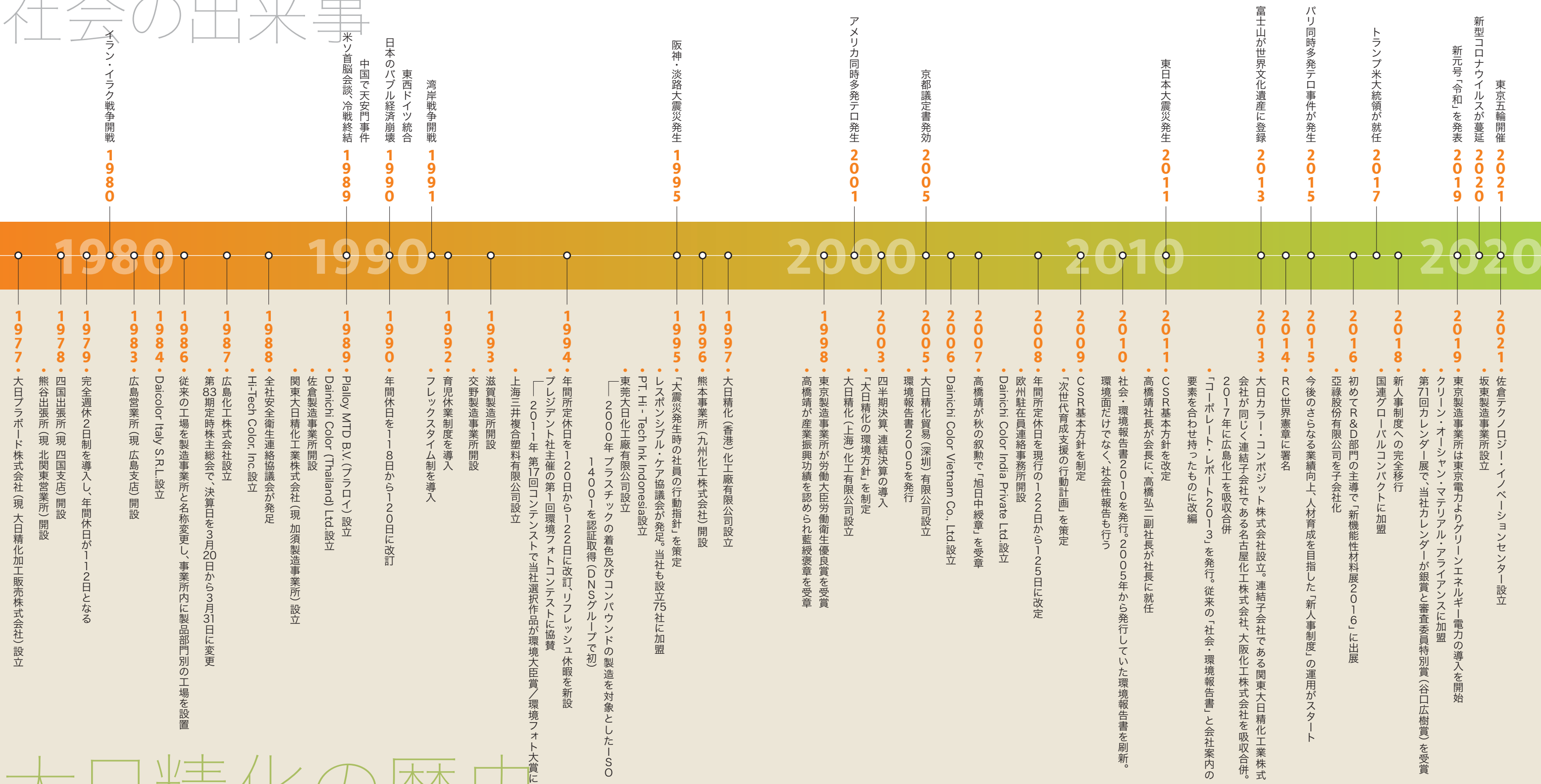
ペリカンマーク

ペリカンマークは、1950年に創業者が「ペリカン」を着想し、1951年に社内募集によって定められました。ペリカンは水陸両棲の鳥類であるため、歩くペリカンは日本中を、泳ぐペリカンは世界を制覇するという意味が込められています。また、マークに地球の形を取り入れたのは、国産顔料で美しい色彩を作りだし、世界に雄飛したいとの創立意図を則ったものです。

ペリカンマークの変遷



社会の出来事

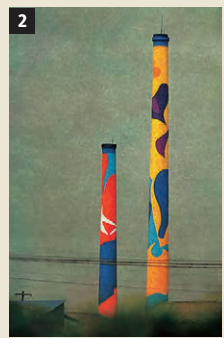


大日精化の歴史

TOPICS 大日精化をシンボライズしたカラー煙突

カラー煙突のデザインを行ったのは、抽象画家の重田良一氏。1963年より制作を始めた大日精化アートカレンダーも1969年、1970年、1984年と担当しました。「煙突のバランスのとれた形を色処理で崩してみたい」と、色は黄・オレンジ・イエロー、オレンジなど計10色を使用し、晴天、曇り、雨天とどんな天候のときでも、はっきりと浮かび出るように華麗な中間色を使用しました。

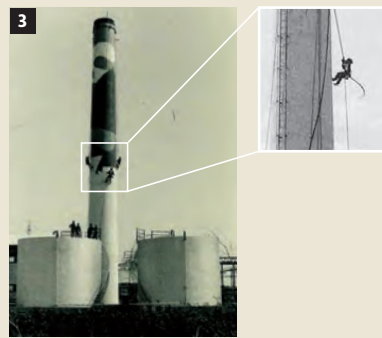
色彩産業としての大日精化を文字表現によってではなく、色彩言語によって印象付けることを、当時何よりも目指していました。一方で、顔料の耐久研究などのねらいもありました。



TOPICS 命綱*1本で15日間

カラー煙突の塗装は、塗装業者ではなく、煙突の製作修復を行う特殊な能力を持った2人の職人によって完成されました。やぐらを組むことなく煙突にぶら下がりて命綱1本で、15日間ほどで仕上げたのです。

※当時の労働安全衛生規則に則り、作業を行っています。



技術と製品の歩み

技術の力で 未開の地を 切り開く

大日精化工業は90年の歩みの中で数多くの新技術・新製品を生み出してきました。

それらの多くは、時代の流れを先読みし、業界に先んじて開発して世に送り出したものです。

当社の「3つのコア技術」である「有機無機合成・顔料処理技術」と「分散加工技術」、「樹脂合成技術」を通して、技術変遷をご紹介します。

有機無機合成・顔料処理技術

有機無機合成・顔料処理技術

1938

紺青・黄鉛・染付顔料・アゾ系顔料の本格生産開始



1944

顔料の2次加工製品として印刷インキ上市



オフセットインキ事業に参入

1949

フタロシアニングリーンを開発・上市

TOPICS

有機無機合成・顔料処理技術とは

顔料合成は化学結合の発色理論を中心に、物理化学や界面化学の知識を総合的に駆使する技術分野です。着色という観点から必要となる、高い「分散性」や「発色性」を実現する技術だけでなく、顔料表面を化学処理して、特殊機能を付与する技術を有しています。

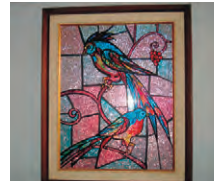
1963

重合体結合色素「セイカゲン」を開発

TOPICS

重合体結合色素の開発

重合体結合色素は顔料に染料の特徴を組み合わせたもので、染料のような色鮮やかさを備えつつ、長期間色褪せない、当時としては画期的な技術でした。海外からも注目され、1964年に米国ファイザー社と技術提携契約を結び、日本初の高級顔料技術の輸出となりました。「セイカゲン」を使った作品



分散加工技術

液状分散技術



1980年頃の「セイカセイフカラー」色見本

1948

塩化ビニール用着ルーターを開スチック用着色剤

色剤「ビニー発・上市」プラ事業に参入

TOPICS

国内初の塩ビ用着色剤と「分散加工技術」

1940年代、同業他社メーカーが印刷用インキと顔料に注力する中、当社は新市場として合成樹脂や合成繊維などの高分子化学を基盤とした工業製品に着目し、新しい着色剤の開発・展開を図っていました。その中で塩化ビニール（塩ビ）の普及を確信し、着色の研究に取りかかりました。この研究過程で、顔料と可塑性を混ぜて均一に練り合わせる「分散技術」を確立。色ムラが起らず、耐熱・耐光性などにも優れた国内初のプラスチック用着色剤「ビニールトナー」を製品化しました。



1950年代のビニールトナーカラー カラーチャート



1950年代のラクチミンカラーカラーサンプル

固体分散技術

1950

塩ビ用グラビアインキ「ビニールシートインキ」を開発・上市、グラビアインキ事業に参入

1953

合成繊維原液着色剤、織布用捺染着色剤事業に参入

TOPICS

繊維原液着色剤、捺染用着色剤

1950年には繊維メーカーと共同で、繊維製品向け着色剤の研究開発を開始し、1953年に合成繊維原液着色剤「スピナーファストカラー」と水性捺染着色剤「ニューラクチミンカラー」が誕生・上市しました。水性捺染着色剤は、当時日本初の自社開発・国産化となりました。この原液着色技術をベースに、ポリプロピレン繊維向けの着色剤開発を次なる目標に定めました。ポリプロピレンは当時、ナイロン繊維よりも強い「夢の繊維」といわれていましたが、染色が難しかったため、当社では、樹脂そのものに顔料を練り込んで着色するポリプロピレン原液着色剤を1955年に開発し、1960年より量産を開始しています。

1955

オレフィン樹脂用をはじめ各種樹脂用着色剤の開発・上市

1961

塩ビ用表面処理剤の研究開発を開始

1963

合成繊維溶融紡糸着色剤を開発

1970

食品包装フィルム用グラビアインキを開発・上市

1971

ウレタン汎用インキの原型を上市

1975

オフ輪インキ上市
プラスチック着色料分野における日本初のコンピュータカラーマッチングシステムを発表

1976

紫外線硬化型コーティング剤事業に参入

樹脂合成技術

ウレタン樹脂・アクリル樹脂合成技術

1966

耐熱性の電気絶縁樹脂上市

1967

ウレタン樹脂事業参入、液状合成皮革用ウレタン樹脂を上市

1971

一液型の合成皮革用ウレタン樹脂上市

1977

熱可塑性ウレタンエラストマーを開発・上市

TOPICS

樹脂合成技術とは

有機化学物質や天然物からプラスチックやゴムを合成する技術です。ウレタン、ポリアミドイミド、アクリル、天然由来高分子などの製品について、目標特性に合わせた自由な素材設計を可能にします。当社はこの技術を活用して、他社にないユニークな製品の開発・生産を行っています。

TOPICS

ウレタン樹脂

1960年代、塩ビ用着色剤を開発していた当社ですが、塩ビ樹脂自体の市場は成熟かつ競争も激しい分野でした。当時、付加価値の高いウレタン樹脂による合成皮革が出始めたころでそこに目を付け、開発を開始しました。

有機無機合成・顔料処理技術

1980

キナクリドン顔料を上市

TOPICS

キナクリドン顔料を上市

キナクリドン顔料は、米国デュポン社が開発した高級顔料です。アジアでの生産拠点を探していた同社が当社の技術力の高さに注目し、生産を受託することになりました。

1985

情報表示・記録分野に参入

TOPICS

複合酸化物系顔料の開発

1980年代、複数の金属酸化物を原料にした顔料で、微小で鮮明な無機顔料を作る当社の高度な技術を生かしたものです。当時はブラウン管テレビのフィルターに採用されました。現在もその耐候性、鮮明性の良さから、屋外用途、特に建材用途で多く利用されています。

TOPICS

AMA（アゾメチンアゾ）顔料の開発・上市

当社が最終的に開発・上市したAMA顔料は黒色ですが、カーボンブラックと比較すると、より赤外光を透過するため、発熱が低く抑えられています。ハワイ・マウイ島にある国立天文台ハワイ観測所の「すばる望遠鏡」の内壁に当社の赤外線透過塗料が使われており、セキュリティ用途やセンサーなどにも用いられています。

TOPICS

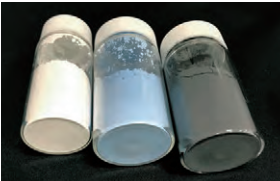
情報表示・記録分野に参入

情報化社会の到来により、1980年代半ば以降、各事業部で情報・電子分野への取り組みが加速しました。顔料分野では、粒子をナノサイズまで超微細化して分散加工する高度なテクノロジーを生かし、IT分野のマーケットに向けた高付加価値製品を生み出してきました。

TOPICS

熱伝導材の開発

色材のみならず、機能性材料の開発を推し進めています。分子を細かく均一に並べることで熱が伝わりやすい状態を作り出す技術で、パソコンや携帯電話など電子部品の放熱部材として利用されています。



アルミナ系熱伝導性無機パウダー「ダイピロキサイド7300シリーズ」

液状分散技術

固体分散技術

1984

コーラ瓶のスチレン用シュリンクインキを開発

TOPICS

インクジェット分散体を開発

高度な分散が要求される「情報表示・記録分野用顔料分散体」は、顔料表面処理技術や分散剤設計技術などを駆使した、3つの当社コア技術を融合してできた製品の代表です。インクジェット用インクは、色材が、染料から顔料へ変わることにより、印刷物の耐水性や耐候性が飛躍的に進化しました。これによりインクジェット印刷は写真プリントなど長寿命なニーズへ対応可能となりました。

1986

軟質硬質両用塩ビ用着色剤を上市（CCMと連動）

TOPICS

水性フレキシインキとバイオマスインキ

2000年代、環境への意識が高まる中、グラビアインキは溶剤を使用するため水性にすることが検討され、水性フレキシインキを開発。段ボール印刷で多く利用されています。また、天然由来素材を使ったバイオマスインキも開発。自社の樹脂合成技術を利用して、インク固形分であるバインダーや分散剤などにバイオマス原料を採用しています。

1998

インクジェット用分散体を開発
ペットボトル用剥離脱色型グラビアインキを上市
非塩ビ用高濃度マスターバッチを開発・上市

TOPICS

UV（紫外線硬化型）とEB（電子線硬化型）コーティング剤

省エネルギーの実現や生産性向上が可能な紫外線硬化技術を導入し、塩ビ床材の保護膜としてUVコーティング剤の市場展開を開始。さまざまな市場で配合・分散技術のノウハウを蓄積し、各種フィルム・シートに機能性コーティング剤として使用されています。UVコーティング剤では困難とされている耐候性の付与、さらなる生産性向上が可能なEBコート材も開発し、建材シートなどに使用されています。

2003

カラーフィルター用顔料本格販売

TOPICS

UV（紫外線硬化型）とEB（電子線硬化型）コーティング剤

省エネルギーの実現や生産性向上が可能な紫外線硬化技術を導入し、塩ビ床材の保護膜としてUVコーティング剤の市場展開を開始。さまざまな市場で配合・分散技術のノウハウを蓄積し、各種フィルム・シートに機能性コーティング剤として使用されています。UVコーティング剤では困難とされている耐候性の付与、さらなる生産性向上が可能なEBコート材も開発し、建材シートなどに使用されています。

2005

フィルム用水性フレキシインキを開発・上市

TOPICS

UV（紫外線硬化型）とEB（電子線硬化型）コーティング剤

省エネルギーの実現や生産性向上が可能な紫外線硬化技術を導入し、塩ビ床材の保護膜としてUVコーティング剤の市場展開を開始。さまざまな市場で配合・分散技術のノウハウを蓄積し、各種フィルム・シートに機能性コーティング剤として使用されています。UVコーティング剤では困難とされている耐候性の付与、さらなる生産性向上が可能なEBコート材も開発し、建材シートなどに使用されています。

2007

NAFカラー（ゼロVOC水性カラーベース）が色材協会賞技術賞を受賞

TOPICS

UV（紫外線硬化型）とEB（電子線硬化型）コーティング剤

省エネルギーの実現や生産性向上が可能な紫外線硬化技術を導入し、塩ビ床材の保護膜としてUVコーティング剤の市場展開を開始。さまざまな市場で配合・分散技術のノウハウを蓄積し、各種フィルム・シートに機能性コーティング剤として使用されています。UVコーティング剤では困難とされている耐候性の付与、さらなる生産性向上が可能なEBコート材も開発し、建材シートなどに使用されています。

2016

バイオマス・グラビアインキを開発・上市
当社初の植物由来原料を用いたグラビアインキで「国際東京包装展2016」にて発表しました。

TOPICS

UV（紫外線硬化型）とEB（電子線硬化型）コーティング剤

省エネルギーの実現や生産性向上が可能な紫外線硬化技術を導入し、塩ビ床材の保護膜としてUVコーティング剤の市場展開を開始。さまざまな市場で配合・分散技術のノウハウを蓄積し、各種フィルム・シートに機能性コーティング剤として使用されています。UVコーティング剤では困難とされている耐候性の付与、さらなる生産性向上が可能なEBコート材も開発し、建材シートなどに使用されています。

2018

バリア性コーティング剤・接着剤を開発

TOPICS

UV（紫外線硬化型）とEB（電子線硬化型）コーティング剤

省エネルギーの実現や生産性向上が可能な紫外線硬化技術を導入し、塩ビ床材の保護膜としてUVコーティング剤の市場展開を開始。さまざまな市場で配合・分散技術のノウハウを蓄積し、各種フィルム・シートに機能性コーティング剤として使用されています。UVコーティング剤では困難とされている耐候性の付与、さらなる生産性向上が可能なEBコート材も開発し、建材シートなどに使用されています。

ウレタン樹脂・アクリル樹脂合成技術

天然物由来高分子設計技術

1985

天然物由来高分子事業に参入
シリコンウレタン樹脂の開発

TOPICS

シリコンウレタン樹脂

ウレタンの強度とシリコンの滑り性・耐熱性を併せ持ち、世界中で多数の特許を取得。感熱記録用コーティング剤市場で圧倒的なシェアを誇ります。

1987

シリコン・フッ素共重合体の完成

TOPICS

アクリル樹脂バインダー・分散剤

当社が2000年代に開発・上市したアクリル合成技術にデザインできるところにあり、リビングラジカル重合います。京都大学と連携して開発しており、関連特許も6件と合わせて、この技術は守られています。代表的なとLRPで作成されたブロックポリマー分散剤の組み合わせたインクジェット用顔料分散液で、大手プリンタ

の特徴は、ポリマー設計を自由（LRP）という技術を応用して30件弱、同大学の基本特許5、応用例は、表面処理された顔料わけに、微分散ノウハウを組みメーカーで採用されています。

2011

CO₂を原料にしたウレタン樹脂を開発
日本で初めてCO₂を原料にしたウレタン樹脂の工業化に成功

TOPICS

バイオマスウレタンとCO₂原料ウレタン

2010年代には環境配慮に着目し、バイオマス原料を使ったバイオマスウレタンを上市。従来のTPUと同等の性能が実現しました。CO₂原料ウレタンは、回収したCO₂を原料に用いた樹脂です。ガスバリア性を備え、食品パッケージの接着剤などに用いられます。フードロスの削減にも貢献できると期待されています。2018年には「第17回グリーン・サステイナブルケミストリー賞 奨励賞」を受賞しました。



溶液型ウレタン樹脂用着色剤「セイカセブン」



10 人、新しいこと、未来 | 2022 Mar.

2022 Mar. | 人、新しいこと、未来 11

持続可能な社会を目指して 大日精化ができること

大日精化は、生分解性素材、脱炭素社会に貢献するCO₂を原料とした樹脂、バイオマス由来製品、水性製品など、環境に調和する製品を開発しています。またエネルギー使用量や廃棄物を削減する製品を開発することでお客様の効率改善にも貢献し、紛争鉱物の不使用などを通して当社グループのみならず、サプライチェーン全体でESGに貢献しています。



色と素材で未来をひらく。

大日精化は、1931年の創業以来、世の中の技術革新にいち早く注目し、新しい技術、製品を生み出すことで、ファインケミカルの立場から社会に貢献してきました。

持続可能な社会の形成が期待される今日、私たちは3つのコア技術をもとに、多様な業界・製品に最適な色と素材を提供し、化学の、そして地球の未来をひらきます。

顔料を祖業に創業90年、磨きつづけた技術でサステナブル社会を支える付加価値の高い色と素材を生み出す会社です。



大日精化工業株式会社

〒103-8383 東京都中央区日本橋馬喰町1-7-6 Tel.03-3662-7111

<https://www.daicolor.co.jp>

顔料／着色剤／印刷インキ・コーティング剤／ウレタン樹脂／天然物由来高分子

日本へ、世界へ、お客さまに価値を届ける ために 大日精化のネットワーク

大日精化は90年の歴史の中で、事業の拡大とともに国内、さらには世界へと拠点を展開していきました。
当社の現在の主な拠点をご紹介します。

国内

営業拠点 生産拠点 研究拠点

交野製造事業所 (大日カラー・コンポジット株式会社 交野製造事業所)

【主な製造品】
合樹・着材第1事業部：プラスチック用着色剤



大阪製造事業所

【主な製造品】
化成事業部：顔料棕染剤、コーティング剤
合樹・着材第2事業部：プラスチック用着色剤



西日本支社



広島支店

大日カラー・コンポジット株式会社 交野製造事業所(広島)

【主な製造品】
合樹・着材第1事業部：プラスチック用着色剤

九州事業所(九州大日精化工業株式会社)

【主な製造品】
グラビアインキ事業部：印刷インキの調色サービス



熊本事業所(九州化工株式会社)

【主な製造品】
合樹・着材第1事業部：プラスチック用着色剤
オフセットインキ事業部：印刷関連製品
コーティング剤



滋賀製造所

【主な製造品】
グラビアインキ事業部：印刷インキ
コート材事業部：コーティング剤



仙台支店

北陸支店

富士営業所

静岡営業所

中部支社

岡山支店

四国支店

東郷製造事業所 (大日カラー・コンポジット株式会社 東郷製造事業所)

【主な製造品】
合樹・着材第1事業部：プラスチック用着色剤



東海製造事業所

【主な製造品】
顔料事業部：有機顔料、無機顔料、加工顔料
ケミカルバイオ統括部：天然物由来高分子



北海道支店

【主な製造品】
オフセットインキ事業部：オフ輪インキ、枚葉インキ、機能性インキ
グラビアインキ事業部：印刷インキの調色サービス

加須製造事業所 (大日カラー・コンポジット株式会社 加須製造事業所)

【主な製造品】
合樹・着材第1事業部：プラスチック用着色剤
機能性材料



坂東製造事業所

【主な製造品】
グラビアインキ事業部：印刷インキ・接着剤・コーティング剤
コート材事業部：コーティング剤



川口製造事業所

【主な製造品】
グラビアインキ事業部：印刷インキ・接着剤・コーティング剤
コート材事業部：コーティング剤



成田製造所(ハイテックケミ株式会社)

【主な製造品】
合樹・着材第1事業部：プラスチック用着色剤・機能性材料
合樹・着材第2事業部：プラスチック用着色剤・機能性材料



佐倉製造事業所(浮間合成株式会社 佐倉製造事業所)

【主な製造品】
ファインポリマー事業部：ウレタン樹脂・接着剤・コーティング剤



東日本支社・本社

東京製造事業所

【主な製造品】
化成事業部：情報記録用材料、合成繊維用原液着色剤、顔料分散体
合樹・着材第2事業部：プラスチック用着色剤・機能性材料
オフセットインキ事業部：オフ輪インキ、枚葉インキ、機能性インキ



私たちの製品が
このような最終製品・サービスに
使用されています

輸送機器

二次電池向け製品、自動車内装・外装、自動車部品、ワイヤハーネス、ステアリングスイッチ

建材・設備

電線被覆、住宅外壁、屋根、床、看板、家具、キッチンパネル、壁紙、ドア

産業資材

太陽電池向け製品、電波吸収体、搬送用ベルト、チューブ、ホース

包装

食品パッケージ、飲料ラベル・ボトル、化粧箱、買い物袋・自治体ごみ袋・クリーニング包装袋、肥料袋

情報・電子

パソコン、液晶ディスプレイ、複写機トナー、インクジェットプリンタ用インク、スマートフォン、タッチパネル、半導体工程材料、家電

衣料品・服飾品

衣料、時計バンド

広告・出版

雑誌、新聞、リーフレット、カタログ、書籍、折込チラシ、書籍装丁、フリーペーパー、ポスター、パンフレット

その他

ゲーム機、文房具、衛生用品、化粧品、スキンケア用品、サンケア用品、ヘアケア用品



海外

-  Color & Functional Products | 顔料、繊維用着色剤、プラスチック用着色剤、コンパウンド、顔料分散体、機能性材料
-  Polymer & Coating Materials | UVコート剤、ウレタン樹脂、天然物由来高分子
-  Graphic & Printing Materials | グラビアインキ、オフセットインキ
-  営業拠点

Plalloy MTD B.V.

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤の製造販売



Dainichiseika Color & Chemicals Mfg. Co., Ltd. Europe Representative Office

※駐在所

Daicolor Italy S.R.L.

【主な事業】
顔料・ウレタン樹脂および関連化学品の輸入販売

Dainichi Color India Private Ltd.

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤の製造販売



Dainichi Color (Thailand) Ltd.

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤の製造販売



Dainichi Color Vietnam Co., Ltd.

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤の製造販売



大日精化貿易（深圳）有限公司

【主な事業】
顔料・印刷インキおよび関連化学品の輸入販売

東莞大日化工廠有限公司

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤の製造販売



亞祿股份有限公司

【主な事業】
プラスチック用着色剤の製造販売

台精化学工業股份有限公司

【主な事業】
ウレタン樹脂の製造販売



大日精化（香港）有限公司

【主な事業】
顔料・印刷インキおよび関連化学品の輸入販売

大日精化（香港）化工廠有限公司

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤および関連化学品の輸入販売

大日精化（上海）化工有限公司

【主な事業】
プラスチック用着色剤およびコーティング剤、ウレタン樹脂、印刷インキの製造販売



上海三井複合塑料有限公司

【主な事業】
樹脂コンパウンド・プラスチック用着色剤の製造販売



三宝精密化学工業株式会社

【主な事業】
無機顔料の製造販売



Hi-Tech Color, Inc.

【主な事業】
ウレタン樹脂およびコーティング剤、印刷インキの製造販売



私たちの製品が
このような最終製品・サービスに
使用されています

輸送機器

自動車内・外装、自動車部品

建材・設備

電線被覆、建築用部材、住宅設備、家具

産業資材

機械工業部品

包装

食品パッケージ、飲料ラベル・ボトル、
サニタリー用品包装、段ボール印刷

情報・電子

複写機、プリンター、家電、パソコン、ス
マートフォン、電器装飾、電子部品

衣料品・服飾品

衣料、時計バンド、靴、カバン

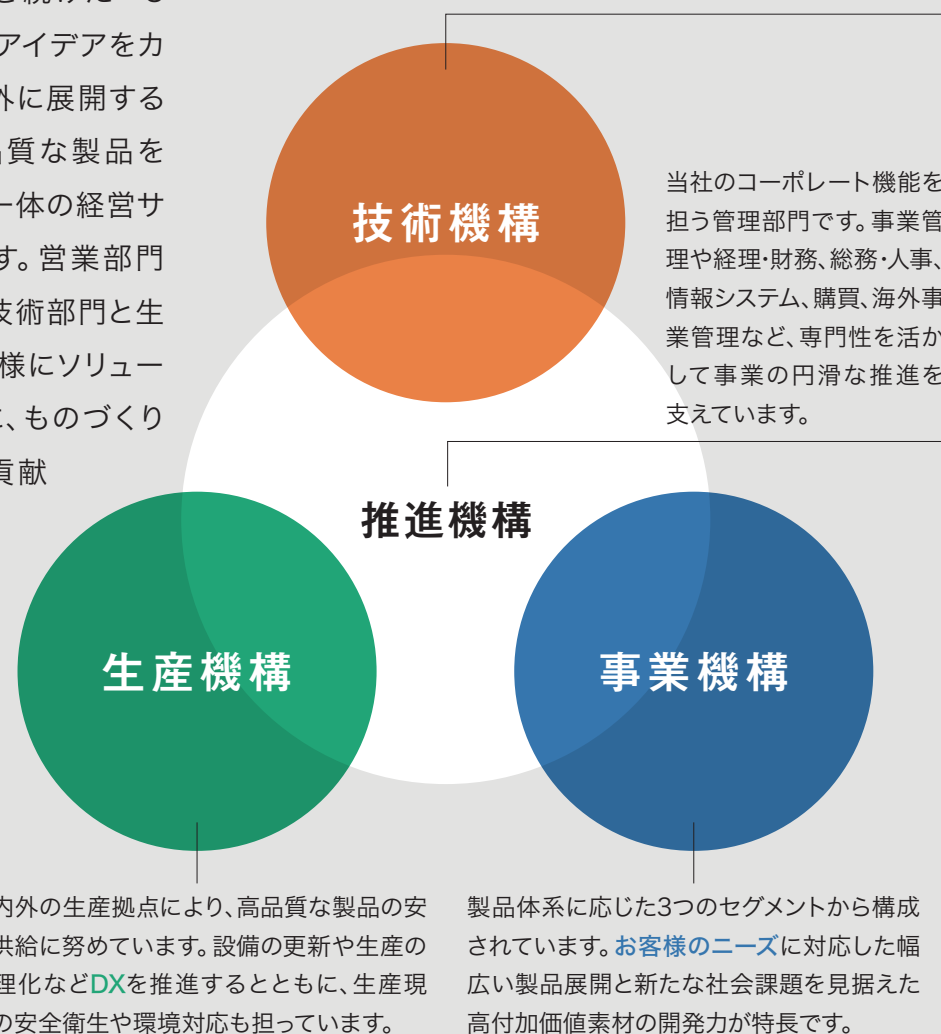
その他

ゲーム機、化粧品容器、日用品、カメラ
部品、トイレタリー製品

私たちの強み

連携力を生かして 社会とお客様に貢献し続ける

当社グループは、「お客様のニーズ」を的確に捉え、創業以来磨き続けた「3つのコア技術」を生かしてアイデアをカタチにするとともに、国内外に展開する「生産現場力」により高品質な製品を安定的に供給する「三位一体の経営サイクル」を強みとしています。営業部門と技術部門の連携、また、技術部門と生産部門の連携により、お客様にソリューションを提供するとともに、ものづくりを通じた社会・環境への貢献を通して、サステナブル社会の実現と持続的な成長を目指しています。



Color & Functional Products

顔料、繊維用着色剤、プラスチック用着色剤、コンパウンド、顔料分散体、機能性材料

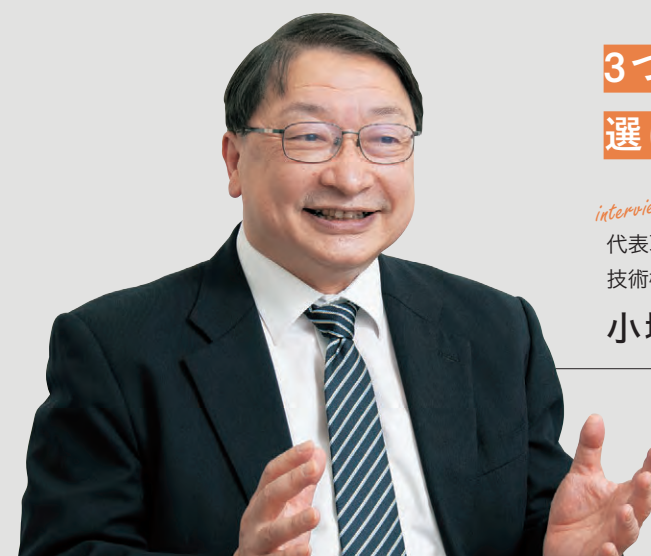
Polymer & Coating Materials

UVコート剤、ウレタン樹脂、天然物由来高分子

Graphic & Printing Materials

グラビアインキ、オフセットインキ

中期経営計画の策定を契機に、今後の基盤事業の再構築や、製品開発の強化、新規事業の育成など、中長期的な成長に向けた事業戦略推進のため、2022年3月期第1四半期連結会計期間の期首より、「Color & Functional Products（カラー＆ファンクショナル プロダクト）」、「Polymer & Coating Materials（ポリマー＆コーティング マテリアル）」、「Graphic & Printing Materials（グラフィック＆プリンティング マテリアル）」にセグメントの変更を行いました。



3つのコア技術を磨き 選ばれ続ける存在に

interviewee
代表取締役常務
技術機構総括
小城 義尚

います。
製品については、今後、これまで以上に環境対応であることが重視されるようになるでしょう。例えば当社の中でも取り扱いの多い自動車関連では、内外装部材は、より軽くて耐久性の高いものが求められるでしょうし、塗装の方法も塗料ではなくフィルムによる全塗装になるかもしれません。そのような変化に当社も対応していくことが求められます。より高性能でリーズナブルなものを生み出してお客様の評価を獲得し続けていきたいと思っています。
創業から90年、これまで当社は着実に成長を続けてきました。3つのコア技術を武器に、お客様と共にさらに成長していきたいと思っています。

当社は3つのコア技術である「有機無機合成・顔料処理技術」、「分散加工技術」、「樹脂合成技術」を基本としてまたそれらを組み合わせることで、お客様のニーズにより柔軟に対応することができます。それが大日精化工業の特徴であり強みです。各事業部にも技術部門があり、お客様のニーズに近いところでの開発に取り組んでいます。私たち技術機構はより長期的な観点で基礎研究や分析、新素材の開発などを進めており、事業部の抱える課題や問題点などを共に解決できるよう、連携を強化して

未来のニーズを見据えて製品開発を加速する

中期経営計画は3カ年ですが、技術機構では5年から10年のスパンで技術開発、テーマ開発を進めています。今年度、各事業部から10年後に大きく育ちそうなテーマを募集し、それらに技術機構が持つテーマを合わせ、40ほどを選定しました。年に3～4回、これらのテーマの進捗確認を行い、成長に向けての戦略を練り続けています。ターゲットとしては中期経営計画で掲げた継続発展分野である「モビリティ」、「パッケージング」、新規発展分野である「IT・エレクトロニクス」、「ライフサイエンス・パーソナルケア」の4つの市場を掲げています。

テーマを選定する上では、ESG、環境対応であることを念頭に置いています。現在もそうで

interviewee
常務執行役員
技術機構担当 合成研究本部、技術管理本部、分散研究第1本部、分散研究第2本部担当

青柳 太洋



技術機構

「私たちの強み」

3つのコア技術

ニーズに応え続けてきたから当社の90年の歴史がある

事業とはお客様のニーズから発するものです。営業がニーズをつかみ、技術陣が形にしてお客様に提示する。技術機構が将来のニーズを予測して研究開発し、世に送り出す。生産が製品を作り、お客様にお納めし、売上になる。その繰り返しです。当社はお客様からの信頼を積み重ね、大日精化工業なら難しい課題でもなん

とかしてくれる、という評判を得続けてきました。こちらからニーズをつかむだけで



なく、お客様の方からニーズを提示して下さることもあります。多くのお客様とそのような関係を築けてきたことが当社の強みです。

一方で、一つの製品を一社のお客様だけにご提供するケースが多くなり、そのお客様にはご満足いただけますが、自ずと製品の規模は小さくなってしまう。

今後、100周年、その先に向けてこれまで培ってきたノウハウなどを海外展開も見据えて規模の拡大につなげたり、事業部をまたいだ技術連携など、総合力をどうやって発揮することができるかが課題と認識しています。

interviewee

取締役
事業機構総括 顔料事業部、化成品事業部、合樹・着材第1事業部、新規事業開発本部、オフセットインキ事業部担当

一関 昌文

未来に向けて、力を一つに

「全員野球」で負けない事業を

今年度の大きな変化がセグメントの変更です。これまで4つあったセグメントを「顔料及び顔料の2次加工製品」「合成樹脂及び特殊コーティング剤」「パッケージ用及び広告出版用インキ」の三つへと再編しました。当社には各事業部が独自の運営をしてきた歴史があります。それでも成長することができたのですが、今後成長を加速するためにはセグメント内・セグメント間でシナジーを創出し、無駄があれば排除する、つまり部分最適から全体最適へと移行する必要があります。

いくら優秀なバッター、ピッチャーがいても、一人では試合には勝てません。レギュラーでない人も含め皆が役割を果たす「全員野球」がで

きれば負けることはない。これからは、各組織が従来の役割を果たすことはもとより、全体最適の経営視点で業務に取り組んでいきます。

当社は90年間を迎えました。それは一つの節目であり喜ぶべきことですが、これからの未来が保証されているわけではありません。歴史を振り返るのは大切なことです。過去の取り組みからたくさんのヒントが得られるでしょう。ただ、振り返るだけでなく、未来に向かっていく強い意志を持っていなければなりません。

interviewee

常務執行役員
事業機構担当 合樹・着材第2事業部、コート材事業部、グラビアインキ事業部、ファインポリマー事業部担当

竹田 治



当社の歴史は挑戦の歴史

これからも困難に挑み続ける

interviewee

取締役
生産機構総括 生産推進本部、東京、大阪、東海、川口、坂東製造事業所、浮間合成、施設・設備本部担当

青葉 匡彦



当社には、人の手による労働集約型の生産をしている部分が多くあります。だからこそお客様の細かなニーズに応える少量多品種生産を実現できるので当社の強みとも言えるのですが、やはり合理化には取り組まなければなりません。その一環として進めているのが工場のDXです。手作業のオペレーションを自動化したり、ベテランの技術をデータ化して目に見えるノウハウとしたり。生産だけでなく、生産管理や資材調達などの事務も自動化を図ります。これらにより競争力を高め、お客様に高付加価値をご提

供できるようにしたいと思っています。

当社は、技術、営業、生産が三位一体となり、連携してきたからこそここまで成長することができました。営業がお客様のニーズをつかみ、技術がそれを形にし、生産は作るための技を磨く。新しい構想が生まれたら、その構想を実現する力を私たち生産機構が備えていないと、絵に描いた餅になってしまいます。

この90年は困難なことに挑戦し続けた歴史です。困難を乗り越えて新しいものを生み出してきたからこそ、これまで存続できたのです。困難への挑戦をやめたら次の90年はありません。これからもものづくりを磨き続けていきたいと思っています。

全体の底上げを図って次の時代に備える

当社が海外拠点での生産を開始したのは1970年代で、早くから生産のグローバル化を推し進めてきました。海外生産の歴史を積み重ねてきたことが私たちの強みとなっています。その例が品質保証です。国内での品質向上への取り組みを海外拠点にも展開しており、海外でも日本と同等の質を備えた製品を作ることができます。当社の海外拠点の多くは日本のお客様の海外進出に合わせて設立されたのですが、今後は当社の製品をいかに現地のお客様に採用していただくかが大きな課題です。

従来から各製造拠点には設備保全・保守を担う工務部門がありますが、生産に携わる従業員、一人ひとりが設備保全の考え方を身に付け予期しない設備トラブルや稼働停止を避けるた

interviewee

常務執行役員
生産機構担当 ハイテックケミ、大日カラー・コンポジット、九州大日精化工業担当

谷 俊夫

めの取り組みを続けてきました。最近の取り組みとしてDXを活用し生産設備のモニタリングを行うことで、設備保全のタイミングを見極めようという試みを始めたところです。生産活動を安全に効率よく行うため、これから全社で取り組みを進めていきます。

これからの社会では、ESG、特に環境への配慮がより企業に問われるようになるでしょう。当社が環境に配慮した製品を作り、サステナブルな社会に貢献し、100周年を迎えられたら素晴らしいことだと思います。大日精化独自の環境対応製品を作り出していきたいですね。



TOPICS 2021

1年の出来事をダイジェストでお届けします。

1月 第27回環境フォト・コンテスト2021 「大日精化工業賞」入賞作品

社会・環境活動の一環として、(株)プレジデント社主催の「環境フォト・コンテスト」に1994年の第1回から27年間協賛しており、募集テーマは一貫して「環境色彩」としてきました。たくさんご応募いただいた中から、優秀賞として有田勉氏の「楽しい時間」を選ばせていただきました。



「楽しい時間」有田氏

2・5・10月 天然素材系パウダーを開発

昨今の環境対応型素材の需要の高まりを受け、当社では、バイオマス素材であるセルロースを原料とした天然素材系パウダーを開発しました。従来、天然物由来素材のビーズは、真珠の発現とともに表面平滑性を発現することが難しいとされてきましたが、これまで蓄積した技術ノウハウを生かして、この問題をクリアしました。



5月 第10回化粧品産技術展 「CITE JAPAN 2021」出展

昨今、化粧品分野においても環境対応型素材の需要の高まりを受け、合成系樹脂ビーズの代替品が求められていることから、顔料事業部より「天然素材系パウダー」をご紹介しました。サンプル展示などで、来場者の皆様より好評を得ることができました。



8月 坂東製造事業所（茨城県坂東市）稼働開始

8月5日に開所式を挙行し、稼働を開始しました。同事業所では、グラビアインキ、フレキシインキ、コーティング剤の需要拡大への対応として省力化を含めた増能力とともに、業務の効率化を図っています。



8月 中期経営計画を策定

本中期経営計画においては、基本戦略として「①技術主導による競争優位性の確保」「②サステナブル社会の実現に向けたESG重視の経営推進」「③事業基盤の強化のための海外事業の拡大（海外売上高向上）」を掲げました。当社グループのさまざまな分野における企業活動を通じて、これまで培ってきた技術をより一層深化させることにより、お客様や我々を取り巻く社会の問題解決への貢献を通じて、持続可能な社会の実現に貢献する製品、サービスを提供する技術オリエンテッドのソリューションカンパニーを目指します。引き続き、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に取り組んでまいります。

10月 2021年度 全社表彰決定 ー物流改善による費用削減 合樹・着材第1事業部 物流改善（ブツカイ）チームー

同事業部の収益改善策の一環として、物流経費削減に着手し在庫量圧縮、物流経費（輸送費、保管費、荷役費）、死蔵品廃棄量の削減を目標に、毎月定例の各部課削減会議を開催し、成果を上げました。本年度の下期では事業部主管製品の廃棄量「0」を達成する予定です。このプロジェクトは全事業部に水平展開されることとなり、物流改善の意識改革につながっています。



ブツカイチームの皆さん

11月 気候関連財務情報開示 タスクフォース（TCFD）提言への 賛同を表明

当社グループはサステナブル社会の実現に貢献する製品・サービスを提供する技術オリエンテッドのソリューションカンパニーとして、ESGを重視した経営を重要な施策の一つに掲げ、企業価値の創出とさらなる成長を目指しています。気候変動への対応についてTCFD提言の趣旨に賛同し、リスクと機会を捉えて経営に織り込むとともにTCFD提言に沿った情報開示を進めていきます。

12月 佐倉テクノロジー・ イノベーションセンター設立

佐倉製造事業所内に新たに「佐倉テクノロジー・イノベーションセンター（略称：STIC）」を設立しました。主なコンセプトとして、「①お客様との協創を第一に、SDGs / 持続可能な社会への貢献を目指す」「②人材育成を図り、イノベーションを無限に創出する職場を目指す」「③新事業創出を加速させるべく、世界中のお客様とのコミュニケーション拠点を目標とする」を掲げ、今後もお客様との協創を重視して展開していきます。



通年 グループ全社で 設備保全活動開始

生産部門と工務部門の「両輪」による設備保全活動への取り組みを開始しました。設備を日々完全な状態で稼働させ、生産および品質安定に寄与、事故などによる公傷を防止することを目的としています。

また、生産に携わる従業員を中心に「自主保全士」の資格取得を推進しており、社内勉強会なども行っています。昨年度は、1級・2級合わせて93名が合格し、現在までに延べ357名が取得しました。



社内勉強会の様子

● 東京製造事業所

活動初年度の今年は、設備のことを理解するため、普段の業務で注視しない箇所を確認する「保全パトロール」の実施や、部品の交換など自分たちで行えるように、工務部員による「設備保全講習」を開催しました。

リアルタイムに点検結果を入力、管理できるシステムを構築しています



● 東海製造事業所

同事業所の設備保全活動は今年で6年目となり、清掃を通じて不具合を抽出・改善し、日常点検のレベルアップを目指した活動を行っています。今後は、設備に異常があった際は生産に携わる全員が早い段階で気付けるようになり、設備保全をしっかりと行える体制づくりに取り組んでいきます。

● 成田製造所

オペレーターが効率の良い作業を行えるよう、作業導線などの改善や自部門が抱えるさまざまな設備トラブルを解決すべく、各部門の設備担当者が中心となって保全活動に取り組んでいます。



Dainichiseika

